巻頭言

天龍寺の霊庇廟と多宝院のこと

名誉顧問　京都大学名誉教授　川上　貢

今年三月末で当協会理事長の職を退きました。昭和63年11月に協会の理事を委嘱され、10年後の平成10年11月に理事長堀内三郎先生が逝去されたあとを承けて理事長に就任して８か年弱、通算18か年も永く協会との縁がつづきました。この二三年は体調や家事の事情もあって、理事会のたびに日程の調整で事務の皆さんにご無理をお願いしお手数をかけました。ここに、あらためて感謝したいとおもいます。

ところで、一昨年秋、嵯峨天龍寺の旧境内の発掘調査で、天龍寺十境のうちの「霊庇廟」の遺跡と推察される遺構が出土し、新聞にも大きくとりあげられました。廟と名がつくところからその性格についていろいろな解釈がみられ、辞典をひくと廟のひとつの解に「霊廟」みたまや、祖先の像や位牌をまつるところとあり、また、「やしろ、ほこら」という解もみられます。

天龍寺が足利尊氏、直義兄弟によって後醍醐天皇の御菩提をとむらうために創建したことはよく知られています。この創建由緒と廟をむすびつけて、霊庇廟を後醍醐天皇の霊をまつる施設であろうという解釈が新聞の記事のなかにみられます。

しかし、天龍寺では霊庇廟は八幡神をまつる寺の鎮守として康永３年（1344）正月に創建されたことが「夢窓国師年譜」から明らかです。禅寺では鎮守に廟と名付るのが慣例になっていたようで、京都の五山の例をあげますと、天龍寺のほかに南禅寺では綾戸廟、相国寺では護国廟、建仁寺では楽神廟と命名している。東福寺は鎮守を成就宮、五社宮と呼んでいるのは異例といえます。禅僧の語録のなかに、北野天満宮を北野霊廟、北野神廟、また伊勢神宮を伊勢神廟と呼んでおり、一般にいう神社は廟と見做されていたようです。禅を通じて漢籍や仏教経典と深い関わりをもっていた禅僧がわが国固有の神や神社について独自な見方をしていることに注目されます。

また、天龍寺では後醍醐天皇の霊をまつる堂舎として多宝院がはやくにつくられてました。天龍寺の新命住持は入山の翌日に一山の僧を率いて多宝院に詣で焼香するのが慣例になっています。また寺の年中行事のなかに八月十五日の後醍醐天皇聖忌に住持が同様に多宝院に詣で拈香しています。

創建間もない貞和２年（1346）に光厳上皇が天龍寺へ御幸されていて、方丈で休息されたのち龍門亭へ登られる途中に多宝院に入り焼香御拝されています（天龍臨幸私記）。記

事から方丈、多宝院、龍門亭の三者の関係位置を推測できます。

「臨川寺領大井絵図」貞和３年（1347）や「応永鈞命絵図」応永33年（1426）には、天龍寺境内の西南に龍門亭が大井川に近く、その北方に多宝院が所在していたことが知られます。それらより東南方の大井川に架かる渡月橋（現在の橋よりも西の上流に所在）から北へ、天龍寺の南裏門へ通じる参道からすこし西へ入り込んで霊庇廟の鳥居と柵列が描かれています。

江戸時代末の天龍寺総絵図によると、大井川に面してたつ天龍寺裏門を入り法堂裏に通じる南北の小路の西側にたちならぶ塔頭列のなかに多宝院後醍醐帝聖廟が所在し、そこから東へ小路の奥に鎮守があり、東面して社殿がたっていました。

幕末の兵火で山内諸建物が被災し、明治維新後の再建復興の過程で塔頭群の整理統合、移転があり、鎮守は方丈の北東の旧雲居庵跡に、多宝院は方丈の北西に移転、再建されて現在にいたっている。

理事長を退いて気持ちにゆとりができ、一昨年秋に話題になり気になっていた天龍寺霊庇廟について資料ノートを整理し、とりまとめたのがこの一文です。